医療保健学研究　1巻：55-65頁（2010）
ISSN 2185-2227

原著論文

清拭に関する研究内容の分析
－過去10年間の研究論文を通して－

細矢智子

つくば国際大学医療保健学部看護学科

【要　旨】清拭に関する研究の内容を分析し、研究の動向を明らかにすることで、今後この領域における研究の基礎的な資料を得ることを目的に、過去10年間の研究論文を対象に分析した。データ収集は、医学中央雑誌Web版において「清拭」「看護技術」のキーワードで検索を行い、最終的に53件の研究論文を抽出した。その結果、以下のことが明らかになった。研究の内容は、1)清拭技術教育の評価に関する研究、2)清拭技術が生体に及ぼす影響に関する研究、3)石鹸や沐浴剤が生体に及ぼす影響に関する研究、4)臨床看護師の清拭の実際に関する研究、5)その他に分けられた。そして、過去10年の清拭に関する研究の動向は、看護基礎教育における技術教育の重要性の高まりと、EBN志向に基づいた看護技術の根拠の検証が影響していた。(医療保健学研究　第1号：55-65頁)

キーワード：　清拭；看護技術

序　論

清拭は身体の清潔を保持するために行われる清潔援助の一つで、基本的な看護技術である。清潔のほか、爽快感が得られ気分転換になるなど、精神面においての効果も期待でき、臨床における日々の看護業務でよく行われている。看護教育においても、学内演習や臨地実習で学生が体験する回数が多い技術といえる。

清拭に関する研究のレビューで代表的なものは、野村ら(1992)による1971～1991年までに発表された全身清拭に関する文献の分析、服部ら(2001)による1992～1999年までに発表された身体の清潔の援助に関する研究内容の分析がある。前者では、「清潔の援助」の中の「全身清拭」に焦点をしぼり、技術を支える科学的根拠がどのように研究されているかを分析している。分析は、湯の温度、タオルの大きさと巻き方および絞り方、拭く速度、洗浄剤とその用い方、アルコールの効果、被覆、全身清拭によるバイタルサインおよび疲労度への影響、清拭の目的などの視点で整理し、考察している。これにより、研究レビューと同時に清拭技術の科学的根拠が整理されている。また、後者は内容分析により、身体の清潔の援助に関する研究の領域を14のカテゴリに分類し、さらに類似性により5種類に分類している。それらは、清潔行動および清潔の援助が対象の心身に

連絡責任者：細矢智子
〒300-0051　茨城県土浦市真鍋6-8-33
つくば国際大学医療保健学部看護学科
TEL: 029-826-6622
FAX: 029-826-6776
e-mail: t-hosoya@tius-hs.jp

及ぼす影響、清潔の看護技術が対象の心身に及ぼす影響、清潔に用いる物品・補助具、身体の汚染状況と清潔の援助間隔、清潔の介助者、の項目に焦点を当てた研究として分類されている。そして、これらの研究の流れを受けて、服部ら(2002)が身体の清潔に関する文献を「入浴・シャワー浴が対象に及ぼす影響」と「清拭の技術が対象に及ぼす影響」の視点で研究内容を概観している。また、小元ら(2003)により「清潔用具および補助用具の工夫と開発に関する研究」に焦点をあてた文献研究もある。これらの先行研究から、清潔の援助に関する研究の動向を知ることができ、清拭に関する研究が継続して行われていることがわかる。一方、卯野木ら(1999，2000)は全身清拭に関する教科書の記載を比較し、教科書の内容の実用性の乏しさと根拠の曖昧さを指摘し、教科書と研究の乖離があることを述べている。身体の清潔に関する継続して行われた研究レビューと教科書の比較による指摘から約10年が経ち、最近ではエビデンスに基づいた看護技術に関する教科書(深井，2006；深井と前田，2006；岡崎と角濱，2008)が多く見られるようになり、研究の成果が現れていることがわかる。しかし、教育の現場で教授される清拭の内容と、臨床の現場で実際に行われている清拭の内容の違いに関する報告(三輪木，2004；高橋 他，2005)もある。教育と臨床の乖離という課題を抱え、目的に応じた効果的、効率的な清拭の方法の選択は、教育・臨床どちらにも必要とされているといえる。そのためには、これからもなお清拭に関する研究を行っていくことが重要な意味をなすと考える。この10年間、清拭に関する研究はどのように行われてきたのか、最近行われている研究を概観することは、今後の清拭に関する研究を行う上で意義あることと考える。

本研究の目的は、日本の清拭に関する研究の内容を分析し、研究の動向を明らかにすることで、今後この領域における研究の基礎的な資料を得ることである。

方　法

研究対象

医学中央雑誌 Web 版(Ver.4)において 1999年～2009年の指定で、「清拭」「看護技術」のキーワードで検索を行った。データ収集は2009年10月に行った。検索された240件の研究論文から、タイトルに「清拭」「拭く」が含まれる論文を抽出した。その中から前述の研究レビューおよび総説、解説は除外した。次に論文を概観し、研究の目的や方法の記述が不明確な研究2件、内容の重複している学会抄録集に掲載されている研究2件、過去に発表された研究をまとめ直して投稿された研究 1 件を除外し、分析対象となる研究論文を抽出した。なお、今回は広く清拭に関する研究および報告について動向を知ることを目的としているため、抄録も対象研究論文に含めた。

分析方法

抽出した研究論文を精読し、研究の概要と研究内容について分析フォームを用いて整理した。次に、研究内容を簡潔に表現するようコード化し、コードを記録単位として意味内容の類似性に基づいてカテゴリ化し、各カテゴリに分類した記録単位の数を集計した。分類には先行研究の内容分析の結果やカテゴリを参考に、帰納的な分類を行った。

結　果

分析対象となる研究論文は53件だった。研究内容は、1)清拭技術教育の評価に関する研究(23 件;43.4%)、2)清拭技術が生体に及ぼす影響に関する研究(18 件;34.0%)、3)石鹸や沐浴剤が生体に及ぼす影響に関する研究(6件;11.3%)、4)臨床看護師の清拭の実際に関する研究(4件;7.5%)、5)その他(2件;3.8%)に分

細矢智子／医療保健学研究　1巻：55-65頁（2010）

表1．清拭に関する研究の内容.

（総コード数53件＝100%）

コード化した研究内容	サブカテゴリ	カテゴリ
新たな取り組みとして全身清拭技術の教授方法の評価	授業評価に関する研究（6件;11.3%）	1）清拭技術教育の評価に関する研究（23件;43.4%）
演習方法を変更した看護実践力の育成を目指した演習の評価		
清拭・洗髪演習で事例を用いた授業の効果		
清拭・寝衣交換の自主制作ビデオ教材の効果		
新たな授業展開の評価		
全身清拭技術演習の学生評価から演習に関わった複数教員の指導評価		
清拭方法の教科書間および文献との比較による全身清拭の教育内容の検討	教育内容の検討に関する研究（5件;9.4%）	
学生のチューブ挿入中術直後患者清拭時の問題解決思考から教授学習指導案の検討		
臨床の清拭場面の観察から清潔援助技術の教育内容の検討		
実習指導教員の記述内容分析から臨地実習で清拭技術習得の目標と技術要素の検討		
臨地実習における学生の清拭実施状況から教育のあり方の検討		
清拭で看護者・患者体験による学習効果	患者体験の効果に関する研究（3件;5.7%）	
全身清拭の患者体験に関する考察		
役割別学習の有用性		
学生の清拭技術修得度の実態と課題の検討	清拭技術の習得度に関する研究（3件;5.7%）	
全身清拭の技術テスト評価から学生の技術習得の実際と今後授業の進め方の検討		
臨地実習における学生の清拭技術評価の実施状況		
看護学生が患者に提供した清拭技術の質	臨地実習での学生の清拭の実態に関する研究（2件;3.8%）	
臨地実習での学生の戸惑いと対処行動の実態		
清拭の教授に関する実態調査	その他（4件;7.5%）	
学生の全身清拭の援助計画への患者情報活用の実態		
全身清拭と沐浴技術との習得内容の関連についての調査		
臨床の清拭の実態と教育内容との乖離の要因		
清拭の温熱刺激と摩擦刺激が皮膚温，バイタル及ぼす影響	温熱刺激，摩擦刺激，マッサージ刺激の影響に関する研究（5件;9.4%）	2）清拭技術が生体に及ぼす影響に関する研究（18件;34.0%）
清拭の温刺激温度の違いが年齢，血流量，皮膚温，血圧への影響		
温度刺激温度と時間の違いが皮膚血流量，皮膚温，血圧への影響		
温熱刺激とマッサージ刺激が皮膚の表面温度，血流への影響		
清拭実施中の湯の温度変化と体感温度の関係		
清拭の拭き方の違いから自律神経系反応を比較	摩擦方向の影響に関する研究（4件;7.5%）	
清拭の摩擦方向が血圧，皮膚血流，皮膚温に及ぼす影響		
清拭の摩擦方向が皮膚血流，皮膚温に及ぼす影響		
清拭の摩擦方向の違いが血圧に及ぼす影響		
皮膚の水分量，油分量，pH，清浄度から清拭と入浴との比較	入浴と比較した皮膚の状況に関する研究（2件;3.8%）	
高齢者の清拭，入浴の皮膚表面pHへの影響		
圧力の異なる抹消部温湯清拭が皮膚血流反応に及ぼす影響	その他（7件;13.2%）	
清拭・シャワー浴・入浴の入浴対応型ホルター心電計による自律神経機能評価		
全身清拭の寒冷暴露の影響		
部分清拭によるヘモグロビン濃度の変化を指標に脳血流の検討		
湯の洗浄を取り入れた清拭の効果		
清拭技術の巧拙が皮膚温荷及ぼす影響		
タオル清拭と石鹸清拭の実施の気分に対する効果の比較		
石鹸清拭と泡沫洗浄剤清拭の油分，水分，pH，主観的爽快感比較	石鹸と泡沫洗浄剤や沐浴剤の比較に関する研究（3件;5.7%）	3）石鹸や沐浴剤が生体に及ぼす影響に関する研究（6件;11.3%）
固形石鹸と泡沫洗浄剤のpH，油分，水分，爽快感から比較		
固形石鹸と沐浴剤の皮膚表面の状態，水分量，油分量，pH，主観的評価の比較		
石鹸の泡立てによる石鹸成分の皮膚表面温度，pHからみた除去効果	石鹸の使用方法に関する研究（2件;3.8%）	
石鹸の使用方法の違いによる皮膚表面への影響		
石鹸清拭の皮膚残留度から拭き取り回数の検討	その他（1件;1.9%）	
臨床の清拭の実態と看護師の認識	看護師の認識・判断・活用情報に関する研究（3件;5.7%）	4）臨床看護師の清拭の実際に関する研究（4件;7.5%）
清拭方法の判断要因に関する検討		
看護師の清拭選択に関連する活用情報の検討		
新卒看護師の老年期患者に対する全身清拭の実態	その他（1件;1.9%）	
カラーやコルセット装着患者の緑茶清拭の効果		5）その他（2件;3.8%）
全身清拭に対する患者の満足度		

類された(表1)。

清拭技術教育の評価に関する研究

このカテゴリは、「授業評価に関する研究」、「教育内容の検討に関する研究」、「患者体験の効果に関する研究」、「清拭技術の習得度に関する研究」、「臨地実習での学生の清拭の実態に関する研究」の5つのサブカテゴリとその他4件、計23件の研究論文で構成される。

「授業評価に関する研究」の内容は、授業の新たな取り組みや教授方法の見直しを評価する内容、事例を用いた授業の評価、自主制作ビデオ教材の評価など、教育方法の工夫や教材開発を実践し評価している内容であった。また、学生評価から演習にかかわった教員指導の評価を質的に分析している研究も含まれていた。「教育内容の検討に関する研究」の内容は、教科書の比較、臨床における清拭の観察、学生の実習状況などを分析することから、今後の清拭に関する教育内容を検討する内容であった。教科書を比較した研究では、日米の教科書の比較および文献による臨床現場と教科書を比較し、教育内容を検討する必要性を示唆する内容であった。また、臨床における清拭の観察から、現実場面に対応するための演習内容を検討する内容の研究も含まれていた。その他には、清拭の教授方法の実態調査、学生の学びの実態、清拭と沐浴の知識と技術の関連、臨床の清拭と教育内容の乖離の要因を検討する内容であった。

清拭技術が生体に及ぼす影響に関する研究

このカテゴリは、「温熱刺激、摩擦刺激、マッサージ刺激の影響に関する研究」、「摩擦方向の影響に関する研究」、「入浴と比較した皮膚の状況に関する研究」の3つのサブカテゴリとその他7件、計18件の研究論文で構成される。

「温熱刺激、摩擦刺激、マッサージ刺激の影響に関する研究」では、清拭がもたらす各刺激やそれらの組み合わせ、年齢による影響を、皮膚温や皮膚血流量、血圧などのバイタルサインを指標に分析した内容や、湯の温度変化と体感温度の関係について考察した内容であった。温熱刺激として温度を変えたホットパックを前腕部に貼用し、血流量、血圧、皮膚温で分析している研究や、温熱刺激と摩擦刺激を熱布清拭と熱布貼用で比較し、熱布清拭群の方が皮膚表面の血管拡張及び皮膚血流の増大効果が大きいと考察している研究が含まれていた。「摩擦方向に関する研究」は、“末梢から中枢”、“中枢から末梢”、“往復”など、清拭時の拭く方向の違いを、皮膚温や皮膚血流量、血圧、心拍変動スペクトル解析などで分析した内容であった。4件の摩擦方向に関する研究論文のうち3件は同一研究グループによる研究だった。「入浴と比較した皮膚の状況に関する研究」は、皮膚表面pHや水分量、油分量を比較する内容であった。その他には、圧力の違いや皮膚の露出による皮膚血流量への影響、清拭の脳血流への影響を分析した内容などであった。

石鹸や沐浴剤が生体に及ぼす影響に関する研究

このカテゴリは、「石鹸と泡沫洗浄剤や沐浴剤の比較に関する研究」、「石鹸の使用方法に関する研究」の2つのサブカテゴリとその他1件、計6件の研究論文で構成される。

「石鹸と泡沫洗浄剤や沐浴剤の比較に関する研究」では各洗浄剤を、「石鹸の使用方法に関する研究」では石鹸の使用方法として“泡立てる”、“泡立てない”の違いを、それぞれ表面皮膚pH、皮膚の油分量、角質水分量、主観的な側面から分析した内容であった。石鹸の使用方法の違いが皮膚残留度に影響するという内容や、皮脂や油性の汚れを取り除く石鹸の効果、皮膚への刺激を少なくする石鹸の使用方法を示唆する内容であった。その他は、使用する湯のpHを考慮した上で石鹸の皮膚残留度から石鹸分の拭き取り回数を検討した内容であっ

た。

臨床看護師の清拭の実際に関する研究

このカテゴリは、「看護師の認識・判断・活用情報に関する研究」の1つのサブカテゴリとその他1件、計4件の研究論文で構成される。

「看護師の認識・判断・活用情報に関する研究」では、臨床で行われる清拭の実際から看護師の清拭に対する認識、清拭方法の選択や実施時の看護師の判断、活用する情報を分析する内容であった。その他は、清拭場面の参加観察により看護師の行動を質的に分析する内容であった。

その他

カテゴリに含まれない研究は2件で、カラーやコルセットを装着している患者に対する緑茶清拭の皮膚トラブルの予防効果、全身清拭に対する患者の満足度調査から病棟の看護改善を図る内容であった。

考　察

結果を踏まえ、過去10年間の清拭に関する研究の動向について、看護技術教育の視点と科学的根拠に基づいた看護技術の視点から考察する。

看護技術教育

近年の答申や報告書から、看護実践能力の育成の充実に向け看護基礎教育における技術教育の重要性は高まってきている。その一方で、看護学生の卒業時到達度評価の課題や臨床現場の抱える課題は多く、教育と臨床の乖離と言われて久しく、近年の新人看護師の離職率の高さにもつながっている(日本看護協会，2007)。清拭に関するこの10年の研究論文に、高い割合で技術教育の評価に関するものが存在するのは、このような状況を反映しているからと考えられる。特に授業評価や教育内容の検討に関する研究が多くを占めている。新たな授業の取り組みを評価した研究(高杉 他, 2009;馬渕 他, 2007；杉山 他，2002)や事例を用いた授業の評価(谷岸 他，2003)、自主制作ビデオ教材の評価(大竹 他，2002)など、教育方法の工夫や教材開発を実践し評価している。また、学生評価から演習にかかわった複数の教員の指導の評価を質的に分析している研究(津田 他，2006)もある。教育内容の検討では、馬醫ら(2008)は日米の教科書 7 部の比較および文献による臨床現場と教科書の比較から、青木ら(2007)は臨床の清拭場面の参加観察を通して分析している。前者は限られた教科書を対象としているが、教科書による石鹸、ウォッシュクロス、湯を用いた標準的な方法と臨床現場での清拭方法の違いを埋めるため、教育内容の検討の必要性を述べており、後者は現実場面に対応するための演習内容を検討している。講義・演習・実習の学習の流れを踏まえ、学内で学んだことと臨床の現場で実際に行われていることのギャップによる学生の混乱を少なくするために、演習における清拭の教授方法を検討することは重要である。研究が行われる背景にはこのような要因が影響していると考える。

また、臨床看護師の清拭の実際に関する研究が存在するが、これらの中にも教育と臨床の乖離を踏まえ、その要因を探るための研究(三輪木，2006)や教育内容の検討を行うための基礎的な資料を得るために看護師の行動を分析している研究(堀井 他，2007)がある。研究の背景には前述と同様に、教育と臨床をつなぐための教育内容の検討の必要性という要因が影響していると考える。

看護基礎教育の学士課程は、1991 年(平成3)には11校、1999年(平成11)には72校であった(文部科学省ホームページ；閲覧日 2010年1月28日)が、2009年(平成21年)4月現在で178校(高橋, 2009)となり急速に増加してい

ることがわかる。各大学ではそれぞれの理念に基づく人材育成と教育課程を策定し、特色ある教育活動の展開、独自の方法の開発が求められている。また、現在に至るまで看護教育制度は学士課程のほか、短期大学、専門学校、高校および専攻科の5年間の教育など、多様で複雑である。学士課程が増えているが、従来からの教育制度の複雑さは変わらず、各教育機関には特有の問題や課題が存在すると考えられる。このような中、清拭技術の教育を実践、評価し、教育内容を検討することで、教育効果を最大限に引き出そうとする教員の姿勢が伝わってくる。技術教育の評価に関する研究が多いことは、このような背景から個々の看護教員が看護技術教育の重要性を認識し、より質の高い教育を実践することを目標に日々努力していることの表れであるように見える。

科学的根拠に基づいた看護技術

先行研究においても看護技術の根拠となる研究結果が報告されており、これまでにも経験上行われてきた清拭の方法を支持する、あるいは一石を投じる内容もあった。清拭の摩擦方向に関する研究がこれに該当する。従来から清拭時の拭く方向は、“末梢から中枢”に拭くことが標準とされてきた。しかし、研究結果からその根拠が問われるようになった。

摩擦方向に関する研究は服部ら(2002)の報告でも触れられており、研究者の基準の違いにより異なる研究結果で、検討の必要性が述べられている。今回、4件の摩擦方向に関する研究論文のうち 3 件は同一研究グループによる研究(草川 他，2002；吉岡 他，2002，2003)で、継続した研究がされていることがわかる。それによると、乾いたフェイスタオルによる“末梢から中枢”“中枢から末梢”“往復”の拭く方向の違いによって、血圧、皮膚温、皮膚血流量に明らかな差はみられなかった。また、安ヶ平(2004)の報告では、摩擦方向を“末梢から中枢”“中枢から末梢”“介入なし”で自律神経系活動を指標として分析し、摩擦する群と介入なし群での有意差はあるものの、異なる2方向においては明らかな差はみられないという結果であった。ただ、“中枢から末梢”の摩擦で交感神経活動が有意に低下しており、眠りに就く前や興奮した患者を静めるためには中枢から末梢に向かって拭く方が効果的であると考察している。このように摩擦の方向によっての明らかな生体への影響は示されていないが、須藤ら(2008)の圧力の異なる末梢部温湯清拭の実験では、“末梢から中枢”に頻回(約3分に120回)に温湯清拭することで、清拭を実施していない反対側を含めた末梢皮膚の血液循環を一定時間にわたり促進させることを確認している。摩擦刺激、温熱刺激の影響を考慮しなければいけないが、経験上言われてきた“末梢から中枢”に拭く方向が、血液循環を促すことを支持している。しかし、臨床の現場において実験時のような頻回の清拭は現実的に難しく、実験という限られた条件下での結果を踏まえ、現場でどのように反映させていくかは今後の課題と言える。

次に、服部ら(2001)の身体の清潔援助に関する研究内容の分析では、「清潔行為における温熱刺激が心身に及ぼす影響に関する研究」が全体の2割を占め、最も多い研究内容であった。これは清潔援助全般を分析したもので、清拭だけでなく入浴や足浴などが含まれていることも関係していると考えられる。今回も 2)清拭技術の生体への影響に関する研究のカテゴリの中の、サブカテゴリでは「温熱刺激、摩擦刺激、マッサージ刺激の影響に関する研究」として、最も多い5件の研究論文で構成されていた。河合ら(2002，2003)は温熱刺激として温度を変えたホットパックを前腕部に貼用し、血流量、血圧、皮膚温で分析している。皮膚温より低い35℃の場合、1分後に血圧の上昇を認めたが、皮膚血流量や皮膚温においては温度間での差は見られなかった。また、20代と40代の年代別で血圧、皮膚温に反応の差が見られたとあるが、被験者の数が10名、4名とばらつきがあ

り検討の必要性がある。さらに、松村ら(2003)は、温熱刺激と摩擦刺激を熱布清拭と熱布貼用で比較し、熱布清拭群の方が皮膚表面の血管拡張及び皮膚血流の増大効果が大きいと考察している。これは温熱刺激と摩擦刺激が同時に加わる清拭の影響として、皮膚血流の増大効果を目的とする場合に有用な結果と言える。

また、石鹸や沐浴剤の生体への影響に関する研究に関しては、山口ら(1990)の石鹸清拭における皮膚残留度の研究が拭き取り回数の根拠として、教科書等でよく使われている。今回の対象論文において、月田ら(2002)は石鹸を“泡立てる”ことで皮膚はきめが細かくなめらかになり、“泡立てない”と乾燥しやすくなるが、皮膚表面 pH は泡をたてた方が高く推移し清拭前に戻るのも時間を要したと報告している。一方、深田ら(2003)はすすぎ湯の中の石鹸成分を除外し、拭き取りごとにウォッシュクロスを交換し実験を行っている。結果は“泡立てる”方が“泡立てない”より石鹸成分が皮膚に残留しない、つまり拭き取り回数を少なくできるというもので、石鹸の使用方法の違いが皮膚残留度に影響するという結果を示している。また、谷澤ら(2005)の報告では、使用する湯の pH を考慮すれば 2 回のふき取りで十分であるという結果であった。皮脂や油性の汚れを取り除く効果や皮膚への刺激を少なくする石鹸の使用方法などが明らかにされており(月田 他、2003)、石鹸清拭は使用物品の多さや時間がかかるなど、臨床ではあまり行われないようになっているが、汚れの種類や程度により必要に応じて選択すべき援助であることを裏付けている。

以上のように、研究により清拭の持つ温熱刺激や摩擦刺激が生体に及ぼす影響や石鹸の使用方法に関する科学的な根拠が明らかになり、研究の動向では Evidence-Based Nursing (EBN)を支持している。EBN は経験だけでなく研究データに基づいた実践を追究することでケアの質を向上させるキーワードととらえられている(深井，2006)。このような研究の積み重ねは今後の看護を支え、看護独自の機能を発展させるための基礎をなす。一方、川嶋(2007)は統合医療と看護教育について、先人の経験知を発掘し、これらを仮説とする新たな実践、研究を通して看護の技術化の課題に近づけるとし、実践を重ね、経験を通してその確かさを実証することを強調し、科学的検証のみではなく経験を通しての実証も大切にしたいと述べている。このことは、実験という限られた条件下での検証に止まることなく、どのように臨床へ応用していくかという課題を指摘している。根拠に基づいた看護技術の実践が看護の質を高めることから、研究と実践、そして教育も加わり、それぞれが看護の質の向上という共通の目標に向かって関係を保つことが重要である。

また、今回対象とした研究論文の多くが健康成人を対象にしていることから、看護の対象である疾患を抱えた人への影響も検証されることが望まれる。これには倫理的な手続きが重要となり慎重な対応が求められるが、今後の清拭研究の課題の一つと考える。

本研究の限界と課題

本研究により清拭に関する研究の動向を概観することができたと考えるが、医学中央雑誌データベースに限定している点や「清拭」に限局してデータを収集しため、限界を有している。清拭は清潔援助の一つとして捉えると、「清潔」に関する研究の中に清拭の研究が含まれている可能性がある。今後は分析対象を増やし、分析および結果の信頼性を高める必要がある。

結　論

清拭に関する研究論文を対象に分析した結果、以下のことが明らかになった。

1. 研究の内容は、1)清拭技術教育の評価に関する研究、2)清拭技術が生体に及ぼす

影響に関する研究、3)石鹸や沐浴剤が生体に及ぼす影響に関する研究、4)臨床看護師の清拭の実際に関する研究、5)その他に分けられた。

2. 過去10年の清拭に関する研究の動向は、看護基礎教育における技術教育の重要性の高まりと、EBN 志向に基づいた看護技術の根拠の検証が影響していた。

参考文献

青木光子，関谷由香里，岡田ルリ子（2007）清潔の援助技術の教育内容に関する検討 臨床の清拭場面の参加観察を通して．日本看護学会論文集：看護教育．)37: 221-223.

卯野木健（2000）看護技術の再構築 清潔篇(7) 援助技術の文献レビュー(2)．Nursing Today 15(7)：64-67.

卯野木健，香春知永，佐居由美，高屋尚子，池亀俊美，砂村由有子（1999）看護技術の再構築 清潔篇(2) 全身清拭．Nursing Today 14: 66-69.

大竹由美子，郷由里子，白川みゆき，小池邦美（2002）「清拭・寝衣交換」自主作成ビデオ教材の効果 基本動作の強調．看護教育の研究．18：228-230.

岡崎美智子・角濱春美 編集（2008）根拠がわかる基礎看護技術．メヂカルフレンド社，東京．

小元まき子，島田千恵子，村上みち子，服部恵子，永野光子，西村あをい，川端麻衣子（2003）看護技術を支える知識に関する一考察－身体の清潔に関する文献を通して 1992～1999（第2報）－．順天堂医療短期大学紀要．14: 151-160.

河合富美子，吉岡多美子，草川好子，林文代，松田たみ子（2002）清拭技術の生体への影響に関する基礎的研究 温度刺激の効果の解析．日本看護科学学会学術集会講演集 22回．105 (abstract).

河合富美子，吉岡多美子，中村可奈，草川好子，林文代，松田たみ子（2003）清拭技術に伴う温刺激の生体への効果に関する基礎的研究 刺激温度,年齢からの解析．日本看護科学学会学術集会講演集 23 回．324 (abstract).

川嶋みどり（2007）統合医療と看護教育，日本統合医療学会編 統合医療－基礎と臨床－．日本統合医療学会．pp34-37.

草川好子，吉岡多美子，中村可奈，河合富美子，林文代，松田たみ子（2002）看護技術がもたらす生体への効果の解析(1) 清拭時の摩擦方向と圧力の違いが血圧変動に及ぼす影響．日本看護研究学会雑誌．25: 204 (abstract).

杉山恵子，小栗ひとみ，吉岡幸，日森昭子（2002）自己学習力を育む演習をめざして全身清拭での取り組み．神奈川県立看護教育大学校紀要．25: 86-90.

須藤小百合，青木健，冨岡真理子，真砂涼子，松田たみ子（2008）圧力の異なる末梢部温湯清拭が皮膚血流反応に及ぼす影響．日本看護研究学会雑誌．31: 121-128.

高杉真子，永井睦子，斉藤理恵子，相場百合，奥田奈美（2009）看護実践力の育成を目指した看護技術演習の取り組み まねる方法から学ぶ方法へ 全身清拭の看護技術演習を通して．神奈川県立平塚看護専門学校紀要．14: 1-8.

高橋清美，佐藤友美，加藤法子，笹尾松美，淵野由夏，永島由理子，中野榮子（2005）看護基礎教育における看護技術教育に関する一考察 臨床における実態調査をもとに．福岡県立大学看護学部紀要．3: 39-46.

高橋照子 編（2009）看護学原論．南江堂，東京．p203.

谷岸悦子，二重作清子，小島通代（2003）基礎看護学における技術教育での事例の効果 清拭・洗髪の演習を通して．日本看護学教育学会誌学．13:138 (abstract).

月田佳寿美，竹田千佐子，，長谷川智子，白川かおる（2003）看護技術における清拭に関する基礎的研究 固形石鹸および沐浴財の皮膚表面への影響に関する客観的・主観的評価．福井大学医学部研究雑誌．4: 35-45.

月田佳寿美，宮崎徳子，長谷川智子，白川かおる，佐藤ゆかり，中垣雅美，南部望，渡辺裕子（2002）清拭における石鹸使用方法の違いによる皮膚表面への影響 皮膚表面解析，皮表角層水分量，皮膚表面のpHを指標として．福井大学医学部研究雑誌．3: 31-38.

津田右子，西澤三代子，柴田京子，武井功子，入江寿美代，平岡正史，古屋敷明美（2006）基礎看護技術演習にかかわった10人の教員への学生評価からの指導評価 看護学生の自由記載法による全身清拭技術演習の指導内容評価への質的分析から．看護学統合研究．8: 10-18.

日本看護協会編（2007）看護白書 平成19年版．日本看護協会出版会．11.

野村志保子，村上みち子，山口瑞穂子，鈴木淳子，工藤綾子，服部恵子，岩永秀子（1992）看護技術を支える知識に関する一考察－全身清拭の文献を通して－．順天堂医療短期大学紀要．3: 1-12.

馬醫世志子，佐藤晶子，城生弘美（2008）学内における基礎看護技術演習についての一考察 教科書比較による全身清拭の検討．群馬パース大学紀要．6: 65-70.

服部恵子，山口瑞穂子，島田千恵子，鈴木淳子，小元まき子，田中志寿子（2001）身体の清潔への援助に関する研究内容の分析－わが国における研究論文に焦点を当てて－．順天堂医療短期大学紀要．12: 1-13.

服部恵子，山口瑞穂子，鈴木淳子，島田千恵子，小元まき子，永野光子，田中志寿子（2002）看護技術を支える知識に関する一考察－身体の清潔に関する文献を通して1992～2000(第1報)－．順天堂医療短期大学紀要．13: 59-70.

深井喜代子 監修（2006）実践へのフィードバックで活かすケア技術のエビデンス．ヘルス出版，東京．

深井喜代子・前田ひとみ 編集(2006) 基礎看護学テキスト EBN志向の看護実践．南江堂，東京．

深田美香，宮脇美保子，高橋弥生，松田明子，南前恵子，内田宏美（2003）石鹸清拭の効果的な方法に関する研究 石鹸の泡立てによる石鹸成分の除去効果について．日本看護研究学会雑誌．26: 169-178.

堀井直子，堀文子，三吉友美子，新美綾子（2007）新卒看護師の老年期患者に対する全身清拭の実態 観察法による調査．中部大学生命健康科学研究所紀要．3: 1-12.

松村千鶴，堀美紀子，淘江七海子（2003）清拭における温熱刺激及び摩擦刺激が身体に及ぼす影響 熱布清拭と熱布貼用の比較．日本看護技術学会学術集会講演抄録集 2回．25 (abstract).

馬渕恵，田中敦子，立山陽子，長嶺洋子，新出恭子，川口ひとみ，徳善加奈子，高雄由紀子（2007）看護教育実践レポート 全身清拭技術における教授方法の一考察．看護展望．32: 938-942.

三輪木君子（2004）臨床における「清拭」の実態と看護師の認識．静岡県立大学短期大学部 平成16年度教員特別研究報告書．1-19.

三輪木君子（2006）臨床における「清拭」の実態と教育内容との乖離の要因を探る．日本看護技術学会学術集会講演抄録集 5回．34 (abstract).

文部科学省ホームページ．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/031/toushin/07091402/007/007.htm（閲覧日：2010年1月28日）.

谷澤智子，石塚香奈子，山元照美，樋之津淳子（2005）石けん清拭の皮膚残留度における拭き取り回数の分析 患者群と看護師群の比較．看護技術．51: 332-334.

安ヶ平伸枝（2004）上肢を異なる 2 方向で拭いた時の自律神経系反応の比較. 日本看護技術学会誌. 3: 51-57.

山口瑞穂子，野村志保子，吉尾千世子，村上みち子，鈴木淳子，工藤綾子，服部惠子（1990）清拭における石けんの皮膚残留度の研究. 順天堂医療短期大学紀要. 1：12-19.

吉岡多美子, 草川好子, 河合富美子, 中村可奈, 林文代, 松田たみ子（2002）看護技術がもたらす生体への効果の解析(2) 清拭時の摩擦方向が皮膚血流と皮膚温変動に及ぼす影響. 日本看護研究学会雑誌. 25: 205 (abstract).

吉岡多美子, 草川好子, 河合富美子, 中村可奈, 渡邉真子，林文代，松田たみ子（2003）看護技術がもたらす生体への効果の解析(3) 清拭時の摩擦方向が血圧・皮膚血流・皮膚温の変動に及ぼす影響. 日本看護研究学会雑誌. 26: 313 (abstract)

細矢智子／医療保健学研究　1巻：55-65頁（2010）

Original article

Trends of studies in bed bath techniques on basis of articles published in recent decade

Tomoko Hosoya

Department of Nursing, Faculty of Health Science,
Tsukuba International University

Abstract

The purpose of this study was to obtain fundamental data for future studies in the fields of bed bathing by analyzing studies on bed bath techniques and by elucidating the trends of studies. The articles published in recent decade were searched by Ichushi (Igaku-Chuo-Zasshi) Web using "bed bath" and/or "nursing skill" as keywords. A total of 53 articles were hit and their results were summarized as follows. The subjects in those studies were classified into five categories: 1) evaluation of education for bed bath techniques; 2) impacts of bed bath techniques on living organisms; 3) effects of bar soap and water-dissolved liquid soap on living organisms; and 4) bed bath practices in clinical nursing, and 5) others. The trends of the bed bathing studies in recent decade may be influenced by an increased importance of technical education in basic nursing education and by an inspection of nursing skills based on evidence-based nursing. (Med Health Sci Res TIU 1: 55-65)

Keywords: Bed bath; Nursing skill